

親も子も 老いて

短編



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

親も子も老いて

山中與隆

目次

親も子も老いて

1

編者あとがき

75

親も子も老いて

作 山中與隆

私たちが初太郎からの夜中の電話で起こされたとき、夕方から降りだした雪が沿岸部には珍しく積もり始めていた。弟夫婦がドライブ先で事故にあつたらしいというのだ。詳しい状況はわからないが、初

太郎は弟たちが収容されているという病院の電話番号を聞いていた。

弟の次郎と嫁の梅子は、広島市郊外の、沿岸部から車で三十分ほどの山間の町にある父初太郎の家の敷地内に自分の家を建てて住んでいた。二人の子供はそれぞれ独立して首都圏で暮らしているから、いまは夫婦二人だけの悠々自適と言っているいい生活である。

る。初太郎は九十になるが、近くにある施設のデイサービスに週三回行くことを楽しみに余生を送っている。その施設には初太郎の妻、つまり私たちの母親である嘉子が入所している。初太郎は自分のデイサービスと嘉子の面会を兼ねているのである。

私より早く定年退職した次郎は、親の面倒を見ながら、自分たちも定年後の生活をエンジョイするつ

もりだと言つてUターンしてきた。首都圏の会社に勤めていた次郎が戻つてくることを初太郎はもちろん、私たちも歓迎した。なにしろ彼らが戻ることになつていた時期、初太郎は認知症の嘉子と二人で暮らしており、私たち夫婦がほとんど毎日のように初太郎のところに通つていたからである。

私が勤めていた会社には、定年はあつてないようなもので、私は定年の年をとつくに過ぎてからも会

社から頼まれるようにして勤めを続けていた。沿岸部の小さな町工場で、住まいもその近くである。

私と妻の花子は、嘉子が認知症になるまでは、三日に一度くらい交代で初太郎夫婦のところに行つてあれこれ世話をしていた。それは私たちの長年の習慣になつていたが、六年前に嘉子が家の中で転んで骨折で入院し、それがきつかけのようにそのまま認知症になつてからは、毎日昼間は花子が自分の軽四

輪を駆って片道約一時間の道のりを往復し、夜は私
が交代して泊り込むというのが日課になった。休日
は夫婦で行って庭の手入れなど普段出来ないことを
することにしていった。

次郎夫婦が四年前に戻ってきてからはその必要が
なくなり、週に一、二度様子を見に行けばよくなつ
た。それは花子の負担を大幅に軽減した。実は、私
たちのところには花子の父勝彦が同居していたのだ。

勝彦が妻を亡くしたのを機に、私たちは離れを建て増して呼び寄せた。高校の社会科の教師だった勝彦は、退職後はほとんど外に出ることもなく、好きな読書と何やら小説のようなものを書いては、あちこちに応募したりしていた。私も妻も、勝彦の作品を読んだことはない。読んでみたいと言うと、入賞でもしたら読んでもらうと言うのだが、結局そういう時は来なかつた。

嘉子が骨折したとき、動転した初太郎からの電話で駆けつけた私たちは、すぐに病院に連れて行つたが、嘉子はそのまま入院、手術となつた。手術後嘉子は激しい妄想に襲われたが徐々に治まると、こんどはつじつまの合わない言動が目立ち始め、やがてこちらの言うことがまったく通じなくなり、嘉子の言うことも日本語ではあるがほとんど文脈をなさなくなつてしまつた。それから点滴の管を引き抜い

たり、ギブスのままベッドの柵を乗り越えようとしたり、食事が来ると看護婦の手からもぎ取るようにして、わしづかみで食べ始めたり、またあるときはまったく食べずにぐちやぐちやに混ぜくったあげくそれを床に撒き散らしたり、箸を折って介助する私たちや看護婦の手を突き刺そうとしたりで、病院側も完全介護といいながら家族の協力を少しでも多く望む状態であつた。初太郎と私たち夫婦の三人が交

代で二十四時間態勢の付き添いを続けた。

身近に認知症などいなかかった私たちは、嘉子は気が狂ったのではないかと思つたほどだ。医者からは、手術や入院生活のショックが原因の老人性せん妄で、徐々に軽くなつていくこともあるが、そうでない場合もあると説明された。私たちにもショックだつたが、初太郎の受けたショックは非常なものであつたと思う。しかし初太郎は人前で、決して毅然とした

態度を崩すことはなかった。その後の検査などで嘉子の認知症の原因が脳血管性のもので、回復の期待が薄いことがわかった。

ギブスがとれ、点滴も必要なくなると嘉子の精神状態は少し落ち着いてきたが、意思の疎通が出来ない点は回復しないままであった。頻度は減ったとはいえわけのわからない攻撃的な行動はなくならず、それは主に初太郎に向けられることが多いように見

えた。

入院間もないころ次郎夫婦が一度見舞いに来た。次郎たちの目の前で、嘉子は看護婦が丁寧に包帯で保護するようにつけていった点滴のチューブを引きちぎり、寝巻きはだけけるのもかまわずベッドの柵を乗り越えようとした。私たちは慌てて嘉子をベッドに押し戻そうとしたが、嘉子は大声で喚きながら抵抗して、手を貸そうとする初太郎の腕に噛み付い

た。やつとのものでベッドに戻された嘉子は、周りの者に向かつて、

「バカ、キチガイ」

などと罵った。そして五分もしないうちにまた、かけてある毛布を払いのけて、ベッドの柵に手をかけた。今度は素早く抑え込まれたので事なきを得た。この様子を見た次郎たちはシヨックを受けたようであつた。自分が知っている母親は、分別をわきまえ

た上品な女性だった。その母の変りように驚くのは当然である。次郎たちは帰り際に、あのような行動は私たちが嘉子の気持ちを探してもつと優しく接しないからで、押さえつけるようなことをせず、本人がどうしたいのかを優しく汲み取るようにすればいい。ベッドから出ようとするのも、オシメにするのではなく、トイレに行きたいのではないか。あれでは嘉子がかわいそうだと言ってわれわれの対応を

責めた。

退院が近づいたころ私たちは、医者への勧めもあつて介護施設の検討をしたが、結局三人の一致した希望で自宅介護をすることになった。初太郎の家は広いのだが古かったので、嘉子の介護生活のために大幅な改造をした。

初めのうちはヘルパーの出張を頼んだりもしたが、初太郎は他人が家の中に居ることを嫌がったので断

った。それから三人がかりの、まさに悪戦苦闘の生活が始まった。

勤めのある私が初太郎のところに行ける時間は制約されている。花子が自分の時間と労力を全面的に私の両親のために捧げた。初太郎は口では、何でも自分で出来ると言いながら、実際には花子が立ち働くかたわらでうろうろしているだけであつた。現実には、オシメを換えるにしても、トイレに連れて行

くにしても、体力的に初太郎には無理があつた。嘉子は何をされるのか訝るのか花子の介助に抵抗することが多かつた。それはたいてい暴力的な抵抗行動であり、すでに六十を過ぎた花子にとつても体力的な限界に近かつた。花子はトイレで嘉子を抱きかかえるようにしたまま一緒に転んだことがある。そばで見ていた初太郎は、

「気をつけてやらんとだめじゃないか。また骨折で

もしたらどうする」

と声を荒げた。

花子は初太郎の夕食の準備をしてから帰宅し、いそいで私の食事を準備にかかるといふ生活であつた。

それでもどちらの家の中もきちんと掃除され、玄関にはいつも新しい花が生けてあつた。どこにそのようなエネルギーを秘めているのか、まさに嫁の鏡といえる花子であつた。私たちの束の間の団欒であ

る夕食をすませるとこんどは私が初太郎たちのところに行つた。花子が帰つてから私が到着するまでの時間をなるべく短くしなければならぬので、毎日そそくさとすませる夕食であつた。

私は初太郎の家に着くと、流しに下げてある食器を洗ふことから始める。初太郎夫婦が、花子の用意した夕食をすませた食器である。たいていは嘉子が途中から遊び散らかした残飯がそのままになつてい

る。私はこれを片付け、風呂を入れた。オシメ生活の嘉子を毎日風呂に入れられないわけには行かない。男二人がかりで嘉子を入浴させた。その後も介護は朝まで断続的に続く。夜中に決まって家の中を徘徊し始める嘉子の見張りが欠かせないからである。私は朝早く起きて、朝食の準備をし、嘉子の汚したものを処理し、洗濯機を回し、三人で朝食をすませてから帰宅する。途中で、私と入れ違いに初太郎のとこ

ろに向かう花子の車とよくすれ違つた。クラクシヨンを軽く鳴らすのが夫婦の朝の挨拶であつた。私は家で着替えるとすぐに出勤である。

そんな生活の最中に、花子の母親が急逝して勝彦を引き取つたのである。勝彦はまだ若くて呆けてもいないから、特に手間がかかるということとはなかつたが、三度の食事を必ず用意しなければならなくなつた。私たち夫婦だけなら食事の時間が少々ずれて

もかまわないし、用意できなくなれば外食も出来る。ところが勝彦は極端に外食を嫌った。その上何事にも几帳面な勝彦は食事の時間に神経質なくらいこだわった。そのため花子は夕食時間を勝彦のためには五分と違わないようにしていた。私は仕事から正確には帰宅できないから、たいてい花子が暖めなおしたものをあとから二人で食べることになった。勝彦は風呂も決まった時間に入りたがったので、花子は

それに合わせて風呂を入れていた。風呂をすませると勝彦は離れに引っ込んで夜遅くまで読書や執筆を続けるというのが毎日の生活であつた。

次郎夫婦は、休みが取れないと言つて、入院中の見舞い以後、一度も来なかつた。しかし、ときどき初太郎のところへ電話はかかつてきたようだ。電話で優しいことを言われて、初太郎は次郎がここに居てくれたらどんなに心強いだろうと私によく言うの

だった。初太郎に言わせると、私に比べると次郎はとても親思いの優しい子なのだそうだ。

次郎夫婦が初太郎の隣に洒落た家を建てて住むようになつて、私たちの生活は一変した。次郎夫婦が嘉子の介護を引き受け、花子は三日に一度くらい手伝いに行けばよくなつたのだ。

ところが次郎夫婦は越してくるとすぐに、私たち

に何の相談もなく嘉子を特別養護老人ホームに入れるべく手続きをしていたのだ。初太郎が、次郎たちがいないときを選んで私のところに電話をしてきて、長々と訴えたので私たちはそのことを知った。初太郎は、次郎がそうすると言ったときに反対したのだ。そうだが、実際に嘉子の介護をするのは次郎と梅子なので、結局は折れざるを得なかつたようだ。

これには花子も私も、どうして自分の親を自分た

ちで介護できないのかと憤慨した。たしかにいまは
楽しみにしてきた定年後の生活をエンジョイする余
裕がないかもしれないが、仕方がないことだし、そ
れもしばらくのことではないか。

初太郎から電話のあつた次の休日に私たちは次郎
のところに行った。初太郎のところには行つても、
それまでは、次郎たちの家のほうに入ることはほと
んどなかった。改めて見るとなかなか洒落た造りに

なっていて、オール電化の家の中はどこもピカピカで、まだ新築のにおいが残っていた。やたらに大きなテーブルに四人で向き合った。私たちはさっそく、必要なときにはいくらでも手伝うから、申し込みを取り下げるようにと説得を始めた。次郎たちは、自分たちが介護をしたくないからではなく、嘉子本人にとってその方がいいからなのだ、都合のいい理屈を並べ立てて自説を変えようとしな。次郎たち

の言い分だと、施設では専門の知識や技術を持った若い介護師たちが、てきぱきと世話をする。彼らは仕事として決まった勤務時間の中ですので、家族のようなエンドレスで出口のない疲労感はなく、笑顔で入所者と接することが出来る。四六時中接している家族ではとてもそうは行かない。自分たちのように年をとったものが、要領を得ないやりかたでする介護は、本人にも余計な負担をかける。家族は夜

中に何度も起きて様子を見に行かなくてはならず、体力的にも消耗が激しい。その結果、必要以上の世話にまで手が回らない。介護する者は疲れきって、家の中はぎしぎししてくる。しかし、施設ではレクリエーションのようなことまでいろいろと工夫されていて入所者たちの生活の質を高めようとしている。入浴も合理的に行われ、栄養が考えられた食事は、自宅とは桁違いに献立が多彩である。在宅介護に比

べると嘉子本人にとって百倍も幸せなはずだと言うのである。それに、初太郎にとつてもゆつたりとした気持ちで暮らせるはずだとも言う。

初太郎が嘉子のそばによつて手をとつて話しかけようとしたりすると、嘉子はしばしば叩いたりつねつたりするのでそうだ。次郎たちに言わせると、嘉子は初太郎を嫌っていて、その潜在的な意識が認知症になつて抑制されなくなり行動に出るためなのだ

そうだ。たしかに初太郎は、私たちが子供のころから、嘉子のすることなすことに文句をつけていた。父が母に優しい言葉をかけるところなど見たこともない。初太郎が長年勤めた役所を退職してずっと家にいるようになってからは、喧嘩が絶えなかつたらしいことは私も知っている。年をとって普段の買出しも以前ほど自由でなくなっているのに、嘉子が準備した夕食を見て、初太郎が、

「こんなものしかないのか」

と大きな声で言っているのを聞いたこともある。

嘉子がこんなことにならない限り、初太郎が嘉子の手を握るなど考えられなかった。さらに、初太郎はこれまでのことで嘉子に対するうしろめたさから、意思表示が出来なくなったのをいいことにペットのようなつもりで、傍で見ている気持ち悪いくらいべたべたしたがる。次郎は言うのである。だから嘉子

を初太郎から引き離すことも嘉子の精神衛生上好ましいといふのが次郎たちの言い分であつた。ふと壁際の棚を見ると、介護に関する本が何冊か並んでゐる。次郎はきつとそれらで仕入れたばかりの知識を並べ立ててゐるのだ。

しかし、次郎たちの言うことに若干の正しい部分があつたとしても、子が親の面倒を見ることを否定するほどの理由はどこにもないと私たちには思へた。

四人の話し合いは平行線のままであつた。

思ひのほか早く嘉子が入所する順番が来てしまつた。初太郎も私たちも反対の気持ちには変らなかつたが、成り行きで嘉子が入所してしまつた。

私たちは時々施設に嘉子を見舞つたが、たしかに次郎たちが言っていたように、嘉子は家に居たときよりも穏やかな表情をしているように見えた。それ

に風呂で洗髪してもらうのか、白髪はさっぱりとした艶のある銀色に輝いていた。家では洗髪に成功したことはほとんどなかった。何よりもレクリエーションを夢中になつてやっている姿など、認知症になるより遥かに前から嘉子の生活からは想像も出来ないことであつた。しかし、車椅子に座つてひとりぽつんと廊下の窓から外を眺めているところなどを見ると、私は胸が締め付けられるような寂しさに襲

われてしまふのをどうしようもなかつた。そんなとき私は、たとえ施設に良い点があるとしても、やはり家族と暮らすべきであるという思いを強くするのだった。次郎は、家での嘉子はもつと不幸せそうだったではないかと言うが、私にはそんなことはなかつたと思えるのだった。

初太郎は送迎バスによるデイサービスの日以外にも頻繁に嘉子に会いに行っていたが、次郎が車で送

るのではなく自分でタクシーを呼んで行くのだった。私たちが初太郎の家に行くことはめっきり減ったが、ときどき施設で初太郎と顔を合わせるようになった。初太郎の話では、今では朝食とデイサービスの日以外の昼食は次郎たちとは別で、自分で作って食べているのだそうだ。洗濯も掃除も自分でやっているらしい。夕食も週に四回は配食サービスを受け始めたという。残りの三回は次郎たちのところで一

緒に食べるのだそうだ。次郎たちはというと、ドラ
イブだ、趣味の会だと出かけては夜遅く帰ってくる
ことが多いらしい。友人を家に呼んで談笑しながら
食事をしている様子が聞こえてくることもあり、そ
のとき初太郎は、一人で冷めかけた配食弁当をぼそ
ぼそつついているのだ。

あまりのほったらかし方に、私は何度か次郎に文
句を言ったが、そういう風にしたほうがかえって老

人の自立心を維持するためにはいいことなのだと言
つて取り合わない。次郎の考えでは、人間は基本的
に死ぬ瞬間まで、自分で出来ることは自分でするべ
きなのだそうだ。初太郎は、きついきつとい言いな
がらも、なんとか自分のことは自分でやっているよ
うだった。いや、私に言わせると、やらされている
のだった。

一方、私の家では嘉子と初太郎から手が離れた分、花子は自分の父親である勝彦の世話が出来ることを喜んだ。

私が退職してからは、三時には勝彦と三人でお茶の時間をとるのが習慣になった。私たちは出かけてもできるだけ早く帰ってきて夕食は必ず勝彦と一緒にするようにはしていた。勝彦が、年のせいでふとんの上げ下ろしも結構しんどいものだと言うと、花子

はその日から勝彦の寢床を上げ下ろしをするようになった。花子が忙しいころは、遠慮して自分の下着などは自分で洗濯機を回したりすることもあつたが、いまはすべて花子に任せている。九十近い初太郎より十歳も若い勝彦のほうかはるかに恵まれた日常を送っているのである。私は何とか次郎たちに、初太郎に対して冷た過ぎることを気づいて欲しいと願ひ続けるのだつた。

そんな生活が続いていくうちに勝彦は、読みかけの本を前にうつらうつらすることや、ぼんやりテレビを眺めていることが多くなってきた。いつの間にか執筆はしなくなっているようだった。心配した花子はよく勝彦のところに話にいった。まったく散歩の習慣がない勝彦は、座ってばかりいるためかひざの調子が悪く、歩くのが不自由になり始めていた。足のせいばかりでなく、運動をしないために心肺機

能も衰えて少し動いただけで息をぜいぜいさせるの
だった。私たちは勝彦を車で医者通いをさせたが、
よくなる風には見えなかった。離れから茶の間に出
てくるのも不自由そうなので、花子が手を引くよう
にしてつれてくるようになった。この勝彦の様子を
見るにつけ私は、初太郎がどんなにしんどい思いで
毎日を送っているだろうと心が痛んだ。私は、いつ
そのこと初太郎をこの家に引き取ろうかとさえ考え

ることもあるのだった。

私たちが深夜の初太郎からの電話で起こされたのは、私たちが昼間出かけて行って、初太郎の九十の誕生日を祝ってから家に帰ったその夜のことだった。次郎たちは、初太郎が九十の誕生日などということにまったく眼中に無く、ドライブに出かけていたのだ。

ドライブ先の九州で次郎と梅子が事故にあつたことを警察が知らせてきたと言うのだ。初太郎は警察に教えられた收容先の九州の病院の電話番号を言った。すぐにその番号に電話すると、はじめ当直が出たが、事情を話すとすぐに救急事務室というところに繋いでくれた。病院は北九州市内だった。わかつたことは、交通事故の負傷者三人が救急車で担ぎこまれたのは、昨夜の十時ころで、そのうち二人が重

態で現在手術中とのことであつた。しかしそれ以上は、けがの状況も、名前もわからないと言う。私が警察から連絡を受けた者で、負傷者の兄だと言うと、「重態のかたは佐藤次郎さまともう一人女性のかたです」と教えてくれた。

私はすぐに、次郎のふたりの子供にそれぞれ連絡した。私たちは、夜が明けるのを待って現地に行く

ことにした。勝彦のためにはヘルパーを頼んだ。初太郎にもと思つたが、初太郎は、自分は大丈夫だから、それよりも次郎たちを頼むと言ふのだつた。

タクシー、在来線、新幹線、タクシーと乗り継いで病院に着いたときは昼前になっていた。私たちはしばらく廊下で待たされた。間もなく看護婦が小走りに私たちを呼びに来た。看護婦の後を速足で行き、案内されたの部屋には、二つのベットが並

べられていて、そのどちらの顔にも白い布がかけてあつた。

「奥様の方はここに着かれたときすでお亡くなりになつていました。ご主人は先ほど十時ころでした」と言つて、私たちにも次郎たちにも一礼してから白布を取つた。そこにあつたのは間違ひなく次郎と花子の固く目を閉じた顔だつた。二人はもう青黒い顔色になつていた。梅子の顔の中央には縦に長く黒々

と縫合した跡があつた。ちようどそこへ次郎たちの息子と娘が夫婦でそれぞれの子供たちを連れて到着した。電話のときに重態らしいと言つてあつたので、ある程度は覚悟してきたと思うが、両親の死に顔を目の当たりにして、呆然と立ち尽くした。娘が耐え切れずに母親のベッドにすがる様に泣き崩れた。息子のほうはじつと立っただまま両親を見据えて堪えていた。私もここに来てからずっと足の震えが止まら

なかつた。テレビでは毎日のように目にする悲惨な出来事だが、自分のこととして考えたことはなかつた。何かにつかまらないと暗い宇宙に吸い込まれてしまいそうな頼りない身体感覚と、交通事故の死者が自分の弟夫婦だということさえ、何度も頭の中で反芻していないと、認識がぼやけていくのだつた。

私たちは、その午後警察に案内されてと事故現場に行つた。現場はすでに片付けてあつたが、警察の

話によると次郎たちが反対車線にはみ出して対向してきた大型トラックと衝突したのだそうだ。警察は異常に長いブレーキの跡と、横からぶつかられていることから、次郎の車がスリップして横向きになりながら対向車線に入ったのではないかと見ていた。昨夜は気温が下がって、このあたりにはみぞれが降っていたという。警察の裏手の駐車場に運ばれていた次郎の車は、丸めた紙屑のようになって原形をと

どめていなかつた。壊れたシートの隙間にいつも梅子が着ていた赤いアノラックの色が見えていた。トラックのほうもかなり壊れたらしいが運転していた人は軽い打撲ですんだということであつた。

次郎と梅子の悠々自適の生活は四年にも満たない短いものであつた。

私たちは、いよいよ初太郎を引き取るときがきた

と思つたが、初太郎は辞退した。自分のことは自分で出来るし、施設に行くのは送り迎えのバスが来るし、病院など必要なときはタクシーが使えるから心配ない。嘉子のいる施設が近い方がいいから、私たちのところに来る気はまったくないと言うのである。そうは言つても、九十過ぎの老人が一人にいるのは心配である。私たちは何度もしつこいくらいに説得したが、初太郎は頑固に断つた。次郎たちが来る前、

花子がさかんに世話をしていたころの初太郎からは想像もできないことであつた。

私は、最近の初太郎と勝彦の表情の大きな違いに気づいていた。初太郎がしつかりと目覚めた表情で、笑顔も多いのにひきかえ、勝彦のほうはいつも眠たそうな目つきをしており、周囲に何があるうと感心もないようなのである。それだけならいいが、勝彦はめつたに笑わない。むしろ常に仏頂面である。毎

日がよほど面白くないのであろうか。

初太郎は非常な高齢にもかかわらず、自分勝手な生活を楽しむ息子夫婦のために放ったらかしにされ、自分のことだけとはいえ炊事洗濯までさせられていた。そしていま突然一人暮らしになつてしまったのである。花子の至れり尽くせりの行き届いた身の回りの世話によつて、心行くまで好きな読書と執筆に打ち込むことが出来た勝彦とはあまりにも生活環境

が違ふ。いかに個人差があるといつても、生き生きとしてゐる初太郎と亡霊のような勝彦とを比べると私は問題を感じずにはおれなかつた。ある食事のとき、

「お父さん、次郎たちのことを考えると私たちもいつ何があるかわからないから、もう一度前のように読書を始めるとか、公民館でやっている歴史の講座に参加してみるとかなさつたらどうでしょうかね。」

それに少しは歩くようにしないと、そのうちトイレにも自分で行けなくなりますよ」

しやべっているうちに少し腹立たしくなってきた。いやみのある言い方になっていた。花子は何を言い出すのかと怪訝そうな顔をして私を見た。勝彦は、「なーに、わしだってその気になりや何でも出来るさ。心配せんでもいい」と言い捨てて、いつもはいかにも足が痛そうに立ち

上がって花子に手を引くように催促するのに、このときはすたすたとひとりで自分の部屋に帰って行つた。なるほどその気になれば出来るものだと私は思つた。勝彦は、独りになつても元気にやっている初太郎の話題が出ると、いつも不機嫌になる。

その後も花子はますます勝彦の世話に精を出した。私たちが夫婦で昼間家を空けなくてはならなくなつたとき、花子は電子レンジで温めればいいように勝

彦の昼食を準備してから出かける。そのようにして出かけたある日、夕食の準備が間に合うように急いで帰宅すると、食卓に揃えていったものがそのまま手をつけずに置かれている。勝彦は、レンジの使用方法がわからなかつたと言つて何も食べていないのだ。勝彦は、

「親がひもじい思いをしているのにいつまで何処をうろついていたのだ」

と、花子を叱るのだった。これにはさすがの花子も、「あれだけ温め方も教えていったのに、それくらいのこととはご自分でしてくださいよ。いままでだって何回もチンしたことあるじゃないですか」と言い返していた。

それから、食事が口に合わない、固くて食べられないなどと言って手をつけないかと思うと、おいしいものだと、少し固くて無理かなと心配しながら

ら出したものでも、私たちよりもたくさんぺろりと平らげるのだった。急に、粥が食べたいと言ひ出して、食卓に出たごはんを作り直させたりもした。

「ゆうべ眠れなくて、食欲がない。お粥なら食べられそうだから・・・」

と弱々しい声で言われると、花子は抵抗できなくなってしまうのだった。

私たちには、自分の時間が出来たら一緒に美術館めぐりをするといふ夢があつた。勝彦がいても活発な老人であれば、山登りなどではなく美術館なのだから一緒に行けるはずなのだが、勝彦はまったく行こうとしない。車に乗るのが嫌だといふのである。私たち自身どんどん年をとつてしまふが仕方なしに、同じような生活を続けるしかなかつた。

勝彦はますます動かなくなり、やがて家の中を車

椅子で移動するようになった。トイレはもちろん、車椅子からの乗り降りもいちいち私たちの介助が必要になった。しかし、頭のほうはいつこうに呆けず、わがままは強まる一方で、すっかり高齢者の仲間になった私たちを困らせた。

勝彦は九十三歳まで生きて大往生した。大往生と言っても、最後の十年間は一日の大半をテレビの前

で居眠りをして過ぎ、気に入らないことがあると怒った獣のような顔をして花子を怒鳴る暮らしだった。怒鳴られる花子も七十になろうとしていた。たまに帰ってきた息子が、繋がれて餌だけ貰っている犬以下だと、勝彦のことを評したくらいである。

私たちは幸いに夫婦揃って、たいした病気もせず長生きした。おもえば定年前からの四半世紀は私たちの介護に明け暮れた年月であった。そしていま

自由の身になってみると、自分自身が七十半ばを過ぎており、何かを始めるには制限の多い年代になっていた。私は運転を止めている。注意力が落ちたためかヒヤツとすることが重なったからである。

最後に、初太郎のことを書いておこう。

初太郎は八年前、最後まで一人暮らしを通して九十六で亡くなった。その三年前に施設の嘉子が亡くな

つたときは、かなり気落ちしていたが、そのときも一緒に暮らそうと言う私たちの申し出をかたくなに辞退した。一人で暮らす気楽さと自信がすっかり身についていたのである。

私は、毎日一回は初太郎に電話を入れて安否を確かめていた。たびたび出かけていった時期もあつたが、そんなにしなくても大丈夫だと言う初太郎の言葉に、電話ですませることが多くなっていた。逆に、

病院に来たからと、初太郎が我が家に来ることさえも何度かあった。

ある朝何度電話しても出ない。私はすぐにバスで駆けつけたが、初太郎はきれいに片付いた部屋の真ん中に敷かれたふとんの中で冷たくなっていた。前日、元気にやっているかと電話で話したばかりだった。私は、何をどうしたらいいのか咄嗟には判断できなくて、花子にすぐに来てくれるように電話した。

花子ももう運転をしていない。折り返すように花子から電話があり、勝彦が昼飯のことでぐずるので、用意をしてから行くといつてきた。私は花子が来るのを待ちながら、眠っているような穏やかな顔で横たわっている父の側に座り込んでながい時間ぼんやりしていた。私は、次郎たちが嘉子や初太郎のことで、自立の気持ちを維持するためにあれこれ言っていたことを思い出した。たしかに初太郎は死の前日

まで自立心を失つていなかつたように見える。

私は自分たちが間違つていたことに、突然気づいた。

しかしそれからさらに十年ちかく、一旦自立の気持ち
を失つた勝彦に、もう一度自立心を持たせることは出来ず。
ずるずると同じような生活を続けたのであつた。

私たち夫婦は、親の世話をすることは正しく美しいことと信じて、できる限りのことをしてきたつもりであつた。しかし、それは勝彦にとつても、私たち自身にとつてもいいことではなかつたのかもしれない。

考えてみれば、自分の子供に対しては子ども自身の将来のためにあらゆる場面で自立を促すように突き放しながら育てる。時にはかわいそうだという気

持ちが働いても、心を鬼にしてまで強い態度を押し通す。そうしないと子供が強くなれないことを知っているからである。強い心を持たないように育った子供が如何に不幸せな人生を歩まなければならぬかがわかつているからである。

老いていく親に対してどうしてそのことを考えなかつたのだらう。老人の場合は、しつかりした人生観を持って壮年期を生きた者でさえ、体力や気力の

衰えに負けて、安易な方に流されてしまふものである。

悔やまれて仕方ないが、過ぎてしまった時間は取り返せない。せめて自分たちは死ぬときまでお互いに自分で出来ることは自分でしようとして、夫婦で話すのだった。次郎たちのように二人同時にあの世に行くチャンスなどあるものではない。だからこれから先の自分たちの問題は切実である。

子供たちが独立して家が広くなつたから、そろそろこっちに来て一緒に暮らさないかと、ことあるごとに言ってくる長男の誘いを、私たちは断り続けている。

完

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

親も子も老いて

2022年9月20日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.photo-ac.com

タイトル：介護

作者：サンサンさん

写真のID：306562

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
